

## 第8章 『若き姿』の国策性と新体制以後の国策映画の一覧

### 1. 『若き姿』の国策性

#### 「映画企画審議会」による国策映画審議

1942年（昭和17）9月「朝鮮映画製作株式会社」が設立されて映画新体制の構築が一段落すると、朝鮮独自の映画が本格的に製作されるようになった。新体制以後の朝鮮映画製作の特徴の一つは総ての映画が戦争動員のための国策映画として製作されたことである。二つ目の特徴は劇映画、文化映画、時事映画が計画的に製作されたこと、三つ目はこのような国策映画を製作するのに「映画企画審議会」の統制を受けるようになったことである。

「映画企画審議会」とは1942年（昭和17）10月に設立された朝鮮総督府傘下の映画統制機構をいう。同審議会は規約第一條にある通り、総督府警務局長が会長を兼任し、映画に関係ある官庁、文化団体、そして朝鮮映画製作及び配給関係者が委員<sup>1</sup>となり、「皇道文化協会」に属して、朝鮮における映画の企画並びに指導助成をするのが目的であった。

同審議会は戦争動員と皇民化を目的とした国策映画の企画指導に当たった。同年12月15日委員全員が集まって第1回の委員会が開かれ、映画文化向上の施策、「朝鮮映画製作株式会社」の製作企画の根本理念に関して論じられた。その結果時局に合った「優秀映画」を重点的に製作することを決め、その第1作目として『若き姿』の脚本審議が行なわれた。同作品は朝鮮人陸軍徴兵制をテーマにしたもので、映画新体制構築後「朝鮮映画製作株式会社」の最初の作品でもあり、当時の国策映画の代表作となっている。

#### 『若き姿』の時代的背景

戦時下兵站基地としての朝鮮における人的資源の強制動員は、労働力動員と兵力動員の二つに分けられる。そのうち朝鮮人の兵力動員は、1937年（昭和12）7月7日に勃発した盧溝橋事件を契機とする日中戦争の全面化以後、1945年（昭和20）8月15日の敗戦にいたるまで志願兵制度と徴兵制度の2段階を経て実施された。

第一段階の志願兵制度として、陸軍特別志願兵制度（1938年度～1943年度）、海軍特別志願兵制度（1943年度～1944年度）、臨時採用陸軍特別志願兵制度（学徒志願兵、1943年度のみ）が実施された。志願兵制度は異民族である朝鮮人に兵役を果たすためのテストケースであり、究極の目標はその施行を積み重ねつつ、徴兵制を実施することにあつた。結局、1942年（昭和17）5月8日「朝鮮同胞に対し徴兵制を実行し昭和19年度より之を徴集し得る如く準備を進むること」が閣議で決定され、翌日の5月9日に内閣情報局より発表され、朝鮮における兵力動員の第二段階としての徴兵制が準備されるようになった<sup>2</sup>。

実は朝鮮における徴兵制施行は日中戦争の前から予定されていた。1936年（昭和11）8月5日第7代朝鮮総督に就任した南次郎は朝鮮統治の目標として、第1は朝鮮に天皇が訪問できるようにすることと、第2は朝鮮において徴兵制度を実施することを決め、彼の在任期間中の総ての政

策はこの二つの目標を実現するためであったという<sup>3</sup>。

南総督がその就任後内鮮一体の統治理念による皇民化政策を一貫して展開したことがこれを立証している。彼は1937年（昭和12）4月道知事会議を開催し、国体明徴、鮮満一如、教学振作、農耕併進、庶政刷新の5大政綱を発表した。そして戦争勃発翌年の1938年（昭和13）4月に開かれた道知事会議で就任後上記の二つの目標達成のための最大方針とした内鮮一体の徹底的具現について次のように断言した。

本事変の齎せる直接間接の形而上下に互る影響と吾人の施行せる事跡とを検討するに五大方針は統治の根本趣旨たる内鮮一体の本流に沿ふて一層新たなる意義を帯び其の実績を挙げ得たることに想致し得るのであります<sup>4</sup>。

内鮮一体の提唱者である南総督自らの定義によると、内鮮一体の意味は「半島人を忠良な皇国臣民とする」<sup>5</sup>ことであった。従って、朝鮮人を「忠良な皇国臣民化」する総ての政策を皇民化政策と総称することができる。南総督による皇民化政策とは1937年（昭和12）から一面（村）一神社の設置を推進しながら神社参拝を強要し、「皇国臣民の誓詞」の暗唱、宮城遥拝、国旗掲揚、君が代の普及、日本語普及、志願兵制度の実施、朝鮮教育令改正による皇民化教育、創氏改名等が挙げられる。その内1938年（昭和13）2月に公布された陸軍特別志願兵制度、同年3月の朝鮮教育令改正<sup>6</sup>、1940年（昭和15）から施行された創氏改名<sup>7</sup>が皇民化政策の3本柱として代表的な政策といわれた<sup>8</sup>。

陸軍特別志願兵制度による志願者の資格は17歳以上の堅固な思想を持っている男性、6年制の小学校以上の学歴者の中で本籍地の道知事が推薦したものであった。1943年（昭和18）までの志願者総数805,513名の内23,681名が志願兵として採用された。志願者が多かったのは官庁により強制的に動員されたためであった<sup>9</sup>。陸軍特別志願兵制度により皇軍として戦争に参加できるようになった朝鮮の若者には日本精神の教育と日本語の習得等による日本人との一体化、即ち皇国臣民としての姿が何より要求された。

このような意味からみると1938年（昭和13）3月に行なわれた第3次朝鮮教育令改正は志願兵制と関係深いことが分かる。教育令改正の核心は朝鮮の若者を皇民化することであり、小学校規定、中学校規定及び高等女学校規定第1条の教育目標として「忠良な皇国臣民」を養成することが規定された。そのために朝鮮語は随意科目にまわされ、学校での朝鮮語の使用が事実上禁止された。又学校の名称を日本と同じ小学校、中学校、高等女学校とし、教科書も在学年限もおなじになり、教科についても朝鮮語を除きすべて日本と同一となった<sup>10</sup>。

このように朝鮮人の皇民化を推進してきた朝鮮総督府は、皇民化の最後の目標であった徴兵制が決定され、大東亜共栄圏建設のために朝鮮の若者が皇軍として参加するようになると、その実施に備えてより積極的に対処しなければならなかった。そして政務総監を委員長として「徴兵制度施行準備委員会」を設置し、戸籍整備、徴兵に対する啓発宣伝、朝鮮人の練成、日本語普及<sup>11</sup>という4項目に重点をおいて国策事業としての徴兵制準備に全力を注いだ。又朝鮮

軍においても印刷物、映画、講演会等を通じて徴兵制実施と皇民化の必然性についての宣伝に拍車をかけた<sup>12</sup>。

日本の閣議で徴兵制が決まった年に『若き姿』が「映画企画審議会」において第1作目として選ばれたのは、その作品が徴兵制に備えて朝鮮人の皇民化と若者の錬成の様子を描いたもので、国策映画のテーマに一番適合したからであった。次は『朝鮮』誌に掲載されている『若き姿』のシナリオの冒頭に書かれてある製作意図である。同作品の製作背景が分かる文書なので引用することにしよう。

昭和十九年実施せらるる朝鮮徴兵制に備へて一視同仁の皇恩に生きる内鮮一如の渾然たる種々相と軍民一如の融然たる諸相を交流展開し、そこに大愛の世界を構成し、戦時下いよいよ豊かなる美しさを発揮する日本の若き姿を啓示し、内鮮共に皇民としての幸福と感謝の念を湧出せんとする意図<sup>13</sup>。

### 『若き姿』の国策性

製作意図にあるように『若き姿』の中には当時の皇民化要素の殆どが組み込まれている。即ち、内鮮一体の強調、日本精神の周知、国語（日本語）常用、朝鮮人志願兵の誇らしさ、徴兵制実施の宣伝、大東亜戦争の合理化、若者の錬成、軍事物資の動員、朝鮮人は天皇の赤子であること等である。

このようにその内容が皇民化と戦争動員メッセージの羅列になっているために、物語の一貫性は欠けている。言い換えれば、起承転結のあるプロット展開の構成ではなく、重要な主題である「天皇の赤子」たる朝鮮の若者の在り方や皇民化完成の姿<sup>14</sup>が点描されているのである。

この映画は主要人物が何人かいるものの、中心になるべき主人公が存在しないのも物語性の稀薄さによるといえる。映画のシーケンスごとに国策の宣伝メッセージが日本人と朝鮮人の多様な登場人物により一つ一つ紹介されていくのである。その展開は次のようである。

映画は朝鮮の中学校の校庭で5年生百数十名が合同で軍事教練を受けている場面から始まる。1944年（昭和19）徴兵制の実施を明年に控えて、皆真剣な様子である。指揮は配属将校の北村少佐がとっている。放課後北村は朝鮮人吉村の家を訪ねる。吉村の娘英子は20歳で、北村は彼女を独身教師、松田と結婚させようと目論んでいる。松田は映画中で一応中心的な役割を果しており、若くて情熱的な朝鮮出身の教師で皇民化の完成体のような人物である。二人は北村の家で初対面の日から好感を持つようになる。徴集令実施を控えた5年生は卒業前に連隊営内において一週間の実習を行うことになった。生徒達は軍事訓練中、連隊長の訓示を通して大東亜建設に向っての心構えや皇国臣民としての姿について学んでいる。松田、大木等教師の引率で訓練の最後に山岳スキー行進に出たが、激しい吹雪の中で遭難事故に遭う。「陛下の赤子を一人でも失ってはならぬ。軍は如何なる犠牲を払っても全員を救助せよ」という連隊長の命令により、捜索機とスキー部隊を動員して救助に成功する。遭難事故の後遺症で入院中の松田を英子とその兄で朝鮮人志願兵の吉村一等兵が見舞い、戦場からの帰還兵である吉村は松田に妹との

結婚を誘う。生徒たちは実習訓練が終わって営内で家族に迎えられ、勇ましく軍歌を歌いながら行進し、列の最後に続く英子と吉村一等兵は営門の外で立ち止って丁寧に頭を下げる（恐らくこの場面は朝鮮人の皇民としての姿勢を象徴しているのだろう）。生徒と白い服の家族皆が一緒になって行進しながら映画は終わる。

『若き姿』の国策性を分析すると三つのメッセージが強調されている。一つ目は日本精神の教育、二つ目は志願兵の宣伝、そして三つ目は朝鮮人が皇国臣民になり天皇の「赤子」として皇軍になれること、即ち徴兵制の合理化とその宣伝である。以下に挙げる場面とセリフはその例である。

映画の冒頭にある学校の校庭や授業の場面では生徒たちに日本精神を強調している。軍事訓練中の生徒達の一糸乱れぬ行進の整然たる隊伍に左足の歩調が苦しそうな柳の姿が目立つ。行進後北村少佐が柳を呼び、靴を脱がせるとぼろ靴のために足が血だらけになっている。

北村「どうしてだまっていた」

柳「はい。松田先生がどんなに困難にぶつかっても、倒れるまでやり通すのが日本精神だと教えました。」

北村「よしッ。その精神だ。休んでいい、職員室へ行って治療して貰え」

柳「はい」

教練の場面には教室での4年1組と4年2組の国語（日本語）と代数の授業のシーンがクロスカッティングされている。国語（日本語）の時間に徳山教師は愛国百人一首を詠んでいる。

徳山「曇りなきみどりの空を仰ぎても君が八千代をまづ祈るかな…誠に美しい日本精神の流露ですな…この歌の詠み人は誰かな？」

春野「愛国百人一首の中の一つで、藤原定家の詠んだ歌です。」

徳山「他に知っているか？」

春野「知っています。百人一首の中で一番若い時に戦死した津田愛之助の歌、たった18歳の時の歌です。先生、高い声で歌ってもいいですか？」

徳山「よろしい」

春野「大君の御楯となりて捨つる身と思へば軽きわが命かな。」

隣の教室では松田教師が代数を教えながら、何人かの生徒に式を聞くと分からないとか調べなかったとかと答える生徒を叱責する場面がある。ここで松田教師は戦時下における朝鮮人の精神武装について次のように語っている。

松田「君たちは、お前らは皆選ばれた朝鮮人である。僕は君たちと一緒に朝鮮で生まれた（このセリフはシナリオにはない）。僕は君たちに真剣に教えているつもりだ。君たちは

それで真剣か、国は真剣勝負しているのだ。戦いぬいている時代だぞ。戦争に弁解が許されるか。いい加減な態度で授業を受ける位なら学校へくるな、皆もっと真剣になれ」

第二のメッセージは志願兵宣伝である。北村少佐が軍事教練を終え、放課後に吉村の家を訪ねる場面がある。吉村は創氏改名した朝鮮人で長男を志願兵として戦場に送った人物である。映画の中で吉村家の設定ショット（Establishing-shot）として、門口には「吉村雲泰」（日本式の氏名に創氏改名した名前）という門札と共に「軍人誉之家」（シナリオ上には「出征家族」と書いてある）の表札が掛かっている。吉村は日本海軍がアメリカ軍艦を沈没させたのを北村と祝うために酒と料理を振舞う。その場で戦線の長男から届いたハガキを出して娘の英子に読ませる。

英子「吉村一等兵は元気です。戦地へ来て2年目になります。今では大砲の音が聞こえない日はさびしいです。機関銃を打たない日は気が晴れません。今日はこれから出動します。元気で出かけます」

又、北村少佐が松田に英子との結婚話を持ちかける時に、吉村が息子を志願兵として出したことを誉めている。

北村「ただ参考に伝えておくが、あの家では、息子を志願兵に出して、目下出征の光栄に悦んでおる家庭だ」

生徒が営内で軍事實習訓練を受けている時に戦線からの帰還部隊に連隊長が行なった訓示の中でも朝鮮の志願兵を誉めている。

連隊長「唯この戦闘に護国の華と散り、或は敵弾に傷ついた諸子の幾多の戦友に対しては、衷心、崇高の感謝を捧げるものである。尚、本部隊には、特に、半島出身の幾多の志願兵がおる。皆よく勇敢に戦い、皇国臣民としての本分を發揮したことは本官は衷心よりその赤誠を喜ぶ。戦場はまだ終わったのではない。いつ又、諸子は天皇陛下のご命令を受けて、再び、戦場に向うの名誉を担うかも知れない。今日以後、一層、大東亜建設の礎石となるの覚悟を固め、一層の自重を望む。終り」

連隊長の訓示の途中、画面は松田を始めとして教師や生徒達の感動する顔が映し出される。この場面は志願兵に対する朝鮮の若者の尊敬と羨望の表現であるに違いない。

三番目は徴兵制についてのメッセージである。『若き姿』は前記したように朝鮮に予定されていた徴兵令の宣伝を目的に製作された映画である。従って、何より徴兵制のことが強調されているのは当然のことであるだろう。徴兵令の宣伝目的のセリフは教室、営内において生徒達

に向かって頻繁に発せられる。

生徒の中山は徴兵令に従い戦士になりたいが、父親は医師になることを願っている。次は中山が松田教師に相談する場面である。

中山「先生！5月9日、朝鮮にも愈々徴兵令が施行されると発表された時、僕達は感想文を書きました。‘これで、これで、やっと肩身の広い気持ちになった’と先生！あれは嘘ではありません。出鱈目ではありません。先生！真底からの叫びだったのです」

松田「うむ」

中山「先生！私は医学博士になるよりも、大東亜戦争の一戦士となって天皇陛下万歳を叫びたいんです」

松田「よし、君のお父さんを、説得してあげよう」

「しっかり頼む。君達こそ大東亜の尖兵だ。その名誉を担っているんだ」

「先生は君たちの年に遠いとしみじみ思うんだ。日本人でありながらも（このセリフはシナリオ上にはない）僕等の時代には、まだ徴兵令は布かれていなかった。僕らに代わって、本当に頑張ってくれ」

生徒の営内実習時に連隊長は軍人精神の涵養と戦争参加について次のように訓示している。

連隊長「諸子は、今日より、畏くも大元帥陛下より賜わった、連隊旗の下、世界に冠たるわが陸軍、軍人と共に起居を同じくするのである。この光栄ある一週間、諸子はよく軍律に服し、忠勇なる軍人精神を涵養するのである。未曾有の大東亜戦争は、人類史上最も崇高なる、理想建設の聖戦である。諸子は幸いにも、この聖戦に参加する名誉を担う若人である。短期間である、貴重なる軍隊生活の体験を通し、以てわが皇軍の真髓を理解することである。以上、訓示とする。終り」

又、生徒の営内実習が終り、学校に帰る前に連隊長は再び徴兵について告げている。

連隊長「諸子の元気は、大いによろしい。然し、諸子の体は尊い体である。陛下の御楯となる体である。大いに自重し、且つ、絶えざる錬成をなして、この次には、立派な兵士として、入営することを待っている」

以上の如く『若き姿』は1944年度からの朝鮮における徴兵制実施に備え、皇民化された朝鮮人の姿、又は望むべき皇民としての姿を描いている。この映画に登場する朝鮮人は老若男女を問わずに日本精神に通じているし、若者は戦線で皇軍として戦い、銃後の人々は物資動員<sup>15</sup>に努める。朝鮮人の登場人物は皆日本語を使い<sup>16</sup>、日本式に創氏改名している。皇民化された若者は「立派な皇軍」となるために錬成に努めている。即ち、登場人物は皆朝鮮総督府と南次郎

総督が望む皇民化の完成された姿である。

『若き姿』の製作に当っては朝鮮総督府、朝鮮軍司令部が特別に後援し、特に製作に万全を期するために日本の映画製作三社（東宝、松竹、大映）に支援を求めた。又、日本のスタッフと俳優<sup>17</sup>が協力し、セット撮影は大映撮影所を使用した<sup>18</sup>。ロケーション撮影は1943年（昭和18）4月10日から日本北アルプス乗鞍、白馬、柵池の雪原等で行われ、駐屯中のスキー部隊の協力を得た<sup>19</sup>。

朝鮮の俳優は黄徹（松田正雄役）、ト恵淑（松田の母）、文芸峰（吉村の夫人）、金玲（英子）等当時の人気俳優が登場した。徴集令実施の準備という絶対的な背景のもとに製作された『若き姿』に対する莫大な支援は、徴兵制の周知と宣伝というその製作意義の重大さを表している。

1943年（昭和18）秋に完成したこの映画は日本と朝鮮で同年12月1日同時に封切られ、朝鮮では12月6日まで<sup>20</sup>、日本では7日まで上映されたが興行的には成功できなかった。日本における興行統計は、全国紅系の映画館58館で封切られ、459,268名が入場し、65位という低調な興行成績に終わった<sup>21</sup>。

## 2. 新体制以後の国策映画の製作

新映画製作社の「朝鮮映画製作株式会社」では国策映画として劇映画、文化映画、時事映画の『朝鮮時報』を製作した。以下の作品は新体制構築後の1943年度（昭和18）に製作された劇映画、文化映画、時事映画<sup>22</sup>と、1944年（昭和19）及び1945年（昭和20）に製作された劇映画<sup>23</sup>である。

### 1943年製作の国策映画の一覧

<劇映画>

『朝鮮海峡』（11巻）脚本佃順、演出朴基采、撮影瀬戸明、主演文藝峰、南承民  
—朝鮮人志願兵一家の愛国の至情を中心に描いたもの。

『若き姿』（11巻）総督府及び朝鮮軍後援、脚本八田尚之、演出豊田四郎、撮影三浦光雄、主演丸山定夫、黄徹、金玲  
—皇国臣民としての自覚に燃える若い学徒群、それを導き育ててゆく人々の献身的情熱に主題をおき、徴兵制実施の朝鮮の逞しき姿を描こうとした映画。

『巨鯨傳』（8巻）脚本佃順、演出方漢駿、撮影金井成一、河野雲造、主演秦薫、金信哉、金素英  
—南鮮沿岸に於ける捕鯨船に取材して海事思想の普及と海員魂の把握とを主題とした映画。

『仰げ大空』（9巻）朝鮮軍報道部、逓信局航空課後援、脚本西亀元貞、吳永鎮、演出金永華、撮影梁世雄、河野雲造、主演文藝峰、羅雄  
—この作品は統制前の旧朝鮮映画株式会社が昭和16年秋から製作にかかっていたもので、銀

翼献金と航空思想普及とを主題とした朝鮮最初の航空映画。

<文化映画>

『吾等今ぞ征く』（2巻）脚本丹野晋、演出朴基采、撮影瀬戸明

—徴兵制実施に備える朝鮮青年の軒昂たる意気と決然たる心構えを説いた国民総力朝鮮連盟の委嘱作品。12月30日より一般映画館に上映、また朝鮮映画配給社の移動映写班により各地に巡回映写された。

『昭和19年』（3巻）朝鮮軍後援、脚本佃順、演出は日活の森永健次郎、撮影瀬戸明、音楽中川栄三

—徴兵検査、入営の感激、内務班の生活等を描き、召される日を前にした適齢青年の為に解説した朝鮮徴兵制の普及宣伝映画。これは総督府の推薦となり、3月22日より紅白両系に一斉封切りされた。尚、5月25日内務省の文化映画認定を得た。

『朝鮮に来た俘虜』（1巻）朝鮮軍後援、編集安田栄、撮影金井成一、<sup>チェスンファン</sup>崔順興

—英軍俘虜の収容所における日常生活を記録したもので、皇軍が彼等を如何に正当に取扱っているかを表した映画。

『半島の乙女たち』（2巻）演出<sup>イ・ビョンファン</sup>李炳煥、撮影金井成一、音楽<sup>キムヘンソン</sup>金海松

—女学校、工場、農村に澆刺と戦う半島の若き女性群像を描出した音楽映画、非認定である。5月22日白系封切。

『栄光の日』（1巻）構成何济逸男、撮影崔順興

—朝鮮に施かれた海軍特別志願兵制度の感激と歓喜を描いた映画で、海軍記念日5月27日に紅白一斉に封切られた。

『蘇る土』（1巻）脚本西亀元貞、演出何济逸男、撮影梁世雄

—戦時下食糧増産の大きな鍵である、旱魃に悩む天水沓の改良を主題とした映画。

『われら軍艦旗と共に』（2巻）構成大野真一、撮影崔順興

—朝鮮家庭から献納ないしは供出された銅、真鍮器具が如何に今日の最重要兵器となるかを説明して銅の回収運動を促進しようとする映画。

『輝く勝利』

—銅の回収運動を促進する目的の映画で、家庭から献納された銅真鍮が如何に今日最重要なる兵器となるかが説明されている。

『田中総監の演説』（1巻）朝鮮総督府情報課委嘱映画

『小磯総督雲山鉦山視察』（2巻）日本鉦業株式会社委嘱映画

<時事映画>—『朝鮮時報』

『第1報』 「ああ」、「南方の礎合同告别式」、「貯蓄功労者表彰式」、「第18回全鮮騎馬大会」、「治安の英魂を祈る」、「燃える赤誠」。12月9日封切。

『第2報』 「大東亜戦争1周年を迎えて1億の民言葉は一つ」、「国民皆兵にあがる炬火」。12



月23日封切。

『第3報』 「農村新年」、「英軍俘虜収容さる」、「大陸の守り厳たり」、「念頭の時」。1月4日封切。

『第4報』 「愛国百人一首」、「冬季錬成氷上競技大会」、「戦う白衣の天使海を護る」。2月8日封切。

『第5報』 「ボクもアタシも決戦だ」、「原始の森と戦う」、「大東亜の建設譜鐵壁の備え防空陣」。3月8日封切。

『第6報』 「錬成年譜」、「教育者懇談会」、「戦う女性」、「魚雷を砲弾をわれらの赤誠で」、「輸送決戦陣」。4月15日封切。

『第7報』 「満州皇帝陛下水豊ダム御巡狩」、「燦たりこの威容」、「増産戦士栄あり」、「朝鮮馬籍藉令施行」、「この恩愛に我等総力で報いん」。5月13日封切。

### 1944年以後の国策映画の一覧

<劇映画>

『兵隊さん』（8巻）脚本西亀元貞、監督方漢駿、撮影李明雨、出演金一海、李錦龍、徐月影、金漢、獨銀麒。1944年6月22日、城寶劇場  
—皇軍として兵員動員の物語

『太陽の子供達』（8巻）脚本西亀元貞、監督崔寅奎、撮影韓滢模、出演金信哉、朱仁奎、水島道太郎（日本側）。1944年11月3日、京城劇場  
—内鮮一体をテーマとした映画

『愛と誓い』（12巻）脚本八本隆一、監督崔寅奎、撮影韓滢模、出演金信哉、金裕虎、高田稔（日本側）。1945年5月24日、明治座  
—1945年に施行された海軍特別攻撃隊志願制の宣伝映画で、神風特攻隊の美化を通じての朝鮮の若者を志願させる意図を持った映画

『神風の子供達』（7巻）脚本八本隆一、監督崔寅奎、撮影山崎一雄、出演金信哉、獨銀麒、高田稔（日本側）。1945年6月10日、明治座  
—海軍特別攻撃隊志願制の宣伝映画である。

朝鮮において映画新体制が構築された1943年（昭和18）以後1945年（昭和20）敗戦まで製作された映画のテーマは一覧で分かるように、徴兵制、海軍特別攻撃隊志願制、時局認識、内鮮一体の徹底、銃後の総力戦等全てが皇民化された朝鮮人の戦争動員に関するものであった。

## 第8章

- <sup>1</sup> 「映画企画審議会」委員には朝鮮総督府の堂本情報課長を始めとして森図書課長、八木保安課長、磯崎警務課長、本多学務課長、竹内練成課長、倉茂朝鮮軍報道部長、津田総力連盟宣伝部長、田中朝鮮映画製作株式会社社長等が新設当時の委員であった。
- <sup>2</sup> 金英達『朝鮮徴兵準備読本』復刻版、不二出版、1993年、1頁（原本は1942年、朝鮮軍事普及協会編纂）。
- <sup>3</sup> 宮田節子『朝鮮民衆と「皇民化」政策』李熒娘訳、一潮閣、1997年、125頁（原文は南次郎伝記からの引用）。
- <sup>4</sup> 『施政三十年史』朝鮮総督府、1940年、410頁。
- <sup>5</sup> 前掲書、『朝鮮民衆と「皇民化」政策』、104頁（原文は「道知事会議ニ於ケル総督訓示」、1939年5月29日、朝鮮総督府官房文書課編『諭告、訓示、演術、総覧』、196頁からの引用）。
- <sup>6</sup> 1938年3月に行われた第3次朝鮮教育令改正の核心は、小学校規定、中学校規定及び高等女学校規定第1条の教育目標として「忠良な皇国臣民」を養成することが規定されている。
- <sup>7</sup> 日本軍は皇軍として「天皇の赤子」である。朝鮮人が皇軍になるためには先ず日本人にならなければならなかった。それで日本語使用と日本人と同様の氏名が強要された。
- <sup>8</sup> 前掲書、『施政三十年史』、411頁。
- <sup>9</sup> 以下は年度別の志願者数及び採用人員である。（前掲書、『朝鮮民衆と「皇民化」政策』、42頁）

| 年 度  | 志願者数    | 入所者数  |
|------|---------|-------|
| 1938 | 2,946   | 406   |
| 1939 | 12,528  | 613   |
| 1940 | 84,443  | 3,060 |
| 1941 | 144,743 | 3,208 |
| 1942 | 254,273 | 4,077 |
| 1943 | 303,294 | 6,300 |

- <sup>10</sup> 木坂順一郎『昭和の歴史⑦—太平洋戦争—』小学館、1994年、274頁。
- <sup>11</sup> 以下は日本語を解する朝鮮人数（同上）

| 年 次  | 人員（万人） | %    |
|------|--------|------|
| 1928 | 129    | 6.9  |
| 1938 | 272    | 12.4 |
| 1940 | 357    | 15.6 |
| 1943 | 572    | 22.2 |

- <sup>12</sup> 次は当時朝鮮軍報道部が発行したパンフレットの『朝鮮徴兵準備読本』に徴兵制度の実施と皇民化の必然性について述べられている宣伝文書の一部である（前掲書、『朝鮮徴兵準備読本』復刻版、その中の原本『朝鮮徴兵準備読本』朝鮮軍報道部監修、朝鮮軍事普及協会編纂、朝鮮図書出版株式会社発行、1942年10月15日初版発行、89頁）。

昭和十九年度から待望の徴兵制度が実施せられんとする今日、二千四百万同胞の中にたとひ一人たりとも皇国臣民たらざるもののあることは、断じて許されないことであることはいふまでもありません。徴兵制度の実施によって、当然さうであらねばならない内鮮一体の歴史的必然に向って更に著るしい飛躍をなすことによって、一人残らず速やかに、完全なる皇国臣民とならなければならないのであります。

- <sup>13</sup> 『朝鮮』朝鮮総督府、1943年6月号、65頁。

- 
- <sup>14</sup> 張赫宙「『若き姿』について」『映画評論』映画評論社、1944年1月号、30頁。
- <sup>15</sup> 映画中でウサギの当番だった生徒が病気で三日間休み、ウサギが餓死してしまった。松田先生がこれは生徒皆の責任であると叱責しながら、ウサギを飼う目的について質問する場面がある。それに対して金剛という生徒は「軍隊の防寒服の毛皮に献納するためです」と答えている。
- <sup>16</sup> 映画の中で使われている全ての言語を日本語にするために、中学生（朝鮮教育令により強制的に日本語を学んだ世代）を取扱った（張赫宙「『若き姿』について」『映画評論』映画評論社、1944年1月号、30頁）
- <sup>17</sup> 日本製作スタッフの編成は、東宝から脚本に八田尚之、監督に豊田四郎、撮影に三浦光雄、俳優としては丸山定夫（北村少佐役）、三谷幸子（北村の夫人）、佐山亮（境少尉）、竜崎一郎（熊沢伍長）、児玉一郎（田島伍長）等が、大映から美術に五所福之介、照明に柴田恒吉、俳優として月形龍之介（副島連隊長役）、永田靖（大木隆介）等が、松竹からは佐分利信（唐沢軍医役）が参加した。
- <sup>18</sup> 「新作朝鮮映画紹介」『映画旬報』映画出版社、1943年7月11日、30頁。
- <sup>19</sup> 島崎清彦「『若き姿』の撮影技術から」『映画評論』映画評論社、1943年6月号、22頁。
- <sup>20</sup> 金鍾旭編著『実録韓国映画叢書（下）』国学資料院、2002年、738頁。
- <sup>21</sup> 『日本映画』大日本映画協会、1944年5月1日号、26～27頁。  
同じ統計によると、1943年度封切映画の中で入場者数の1位は『海軍』の1,752,476名、東宝と高麗映画協会の合作である『望楼の決死隊』は入場者数が893,445名で29位を記録した。
- <sup>22</sup> 「社団法人朝鮮映画配給社概況」『映画旬報』映画出版社、1943年7月11日号、36頁と『日本映画』日本映画出版社、1943年11月号、25頁を参照に作成。
- <sup>23</sup> 前掲書、『実録韓国映画叢書（下）』、759～762頁と、兪賢穆『韓国映画発達史』韓振、1980年、276～277頁を参照に作成。